

だれもが充実したいのちを燃やして生きることができるよう!

私たちは地域・職域・学校など、生活のいろいろな場面で「健康寿命」をのばす運動を実践しています。

よぼう医学

THE NEWS OF HEALTH SERVICE

(平成8年5月20日第三種郵便物認可)

2004(平成16)年6月15日 第377号

(財)東京都予防医学協会
(財)予防医学事業中央会東京都支部
発行人 北川照男・編集人 山内邦昭
発行所 〒162-8402
東京都新宿区市谷砂土原町1の2
保健会館 電話03(3269)1131
http://www.yobouigaku-tokyo.or.jp

毎月15日発行 年間購読料300円(1部30円)

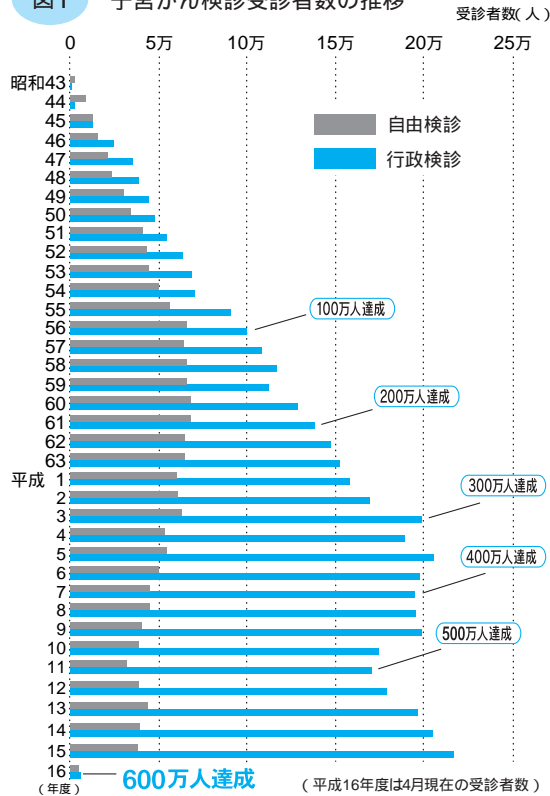


今月の主な紙面

- 1面 子宮がん検診600万人達成
- 2面 特集 健康増進事業実施者に対する「健診の指針」が告示
- 3面 連載「健康教育放浪記」第3回
健康づくり・健康増進を支援するページ 第10回
- 4面 話題「学校における水泳プールの安全・衛生管理」
連載「人間工学からアプローチする快適職場づくり」第9回
- 5面 話題「学校における水泳プールの安全・衛生管理」
「産業医訪問」第57回
- 6面 第195回ヘルスケア研修会「元気づくりの食生活教育」
人間ドック担当の医師ミーティングを開く・本会
予防医学事業中央会 全国運営会議を開催お知らせ

本会と東京産婦人科医学会 行政が協力して実施している子宮がん検診の受診者数が、このほど約600万人を突破した。平成16年4月末までの追跡調査では、この検診で頸がんや体がんあわせて11931人の子宮がんを発見し、そのうちの半数近くが100%治療が期待できる早期のがんであった。昭和43年に全国初の施設検診方式(東母方式)としてスタートして以来36年、関係者の尽力により、この検診は着実に根付き、子宮がんによる死亡の低下に大きく貢献してきた。また、受診者数や追跡率の高さ、徹底した精度管理などの点から世界にも類をみない検診として、高く評価されている。

図1 子宮がん検診受診者数の推移



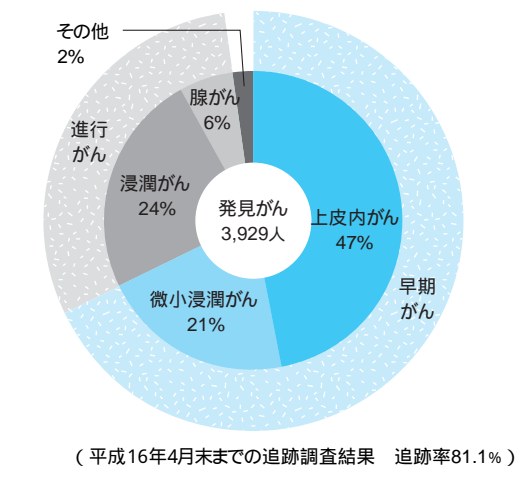
1万2千人の子宮がんを発見し、予防や早期発見に大きく貢献

昭和43年に始まった「東母方式」による子宮がん検診は、それまで行われていた検診車による検診ではなく、受診者が東京産婦人科医学会の医療施設に出向いて検診を行うものである。医療施設や受診者数の多い都市部の特徴を生かした検診システムで、現在では「東母方式」として全国に広がっている。検診には、受診者が自費で

子宮がん検診600万人達成

行つ「自由検診」と、区市町村が公費負担する「行政検診」の2つの流れがある。いずれの場合も、東京産婦人科医学会の医療施設で採取された検体は、本会内の細胞診センターに郵送され、細胞診判定が行われる。この検診は、東京産婦人科医学会の医療施設で実施するので、徹底した精度管理のもとで検診が行える。検診でがんが発見された際には、みやかに治療に結びつけられる。受診者自身が時期や施設を選んで検診できる。窓口となる会員が受診者の主治医となつて、健康づくりや疾病対策を支援できる、などの利点がある。検診開始以来の受診者数の推移は図1の通りである。平成13年度以降の受診者数の増加については、子宮がん関連のマスコミ報道の活発化によって、子宮がん検診に対する女性の意識が高まったことが

図2 行政検診で発見された子宮頸がん (図中の%は、発見がん総数に対するそれぞれのがんの%)



背景にあると考えられる。また、この検診で特筆すべき点は、要精密検査となった受診者に対する追跡調査を約8割に実施できていることである。この4月末までの追跡調査結果では、検診で発見された子宮がんは11931人であり、そのうちの半数近くが100%の治療が期待できる早期がんであった。なかでも自覚症状のない人が大部分を占める行政検診では、子宮頸がんの約7割が早期がんでの発見という素晴らしい成績が得られている(図2)。また、がん発見率の年代別推移をみると、検診を開始した当初は、進行がんが発見される割合が高かったが、検診を重ねるにつれてその割合が徐々に減少し、早期がんや前がん状態である異形成上皮の段階で発見される割合が増加しており、この子宮がん検診の継続が、がんの予防や早期発見、早期治療に大きく貢献していることがわかる。いっぽう、近年子宮頸がんの若年化が問題となつており、この検診の追跡調査でも29歳以下の異形成上皮の増加が目立っている。

こうした背景には、子宮頸がんの発症に関与しているとされるヒトパピローマウイルス感染の若年層での急増問題がある。このため厚生労働省は、さきごろ「がん検診の指針」の改正を行い、子宮がん検診の対象年齢を20歳以上に引き下げるとともに、性感染症予防の見地からの子宮がん予防教育の重要性を盛り込んだ指針を全国の自治体に通達した(本紙376号既報)。これからの子宮がん検診は、若年層をはじめとする検診未受診者の掘り起こしが課題となつてくる。また、多様な生活環境をもつ都市部の女性たちが受診しやすいよう、さらにきめの細かい対応が求められる。本会では、600万人達成を機に検診体制の一層の充実を図るとともに、検診の意義や成果などを積極的に社会に訴えていく必要があると考えている。



稲見一清 本会前理事長が死去
本会の前理事長、稲見一清が5月23日死去した。享年88歳。稲見前理事長は、本会の創設者である故国井長次郎と共に、本会の前身である財団法人東京寄生虫予防協会の草創期から予防医学運動の普及とその実践に取り組み、長きにわたって市民の健康の保持増進に努力した。その間、平成7年7月から9年6月まで本会理事長として尽力した。

東京都予防医学協会 ホームページニュース
http://www.yobouigaku-tokyo.or.jp

健康管理相談をお引き受けします

当センターの会員が事業所、学校、各種団体の健康管理をアドバイスいたします。

お問い合わせ・ご相談は 予約制)
電話 東京(03)3269-1131
健康管理コンサルタントセンター
事務局 東京都新宿区市谷砂土原町1の2
(財)東京都予防医学協会

ご好評にこたえて、機関紙「よぼう医学」の全ページを掲載しています(2003年9月号から)学校保健セミナーやヘルスケア研修会のお知らせを随時掲載しています。

- コンサルテーションのごあんない
- 7月 7日 岡 惺治 (健康管理コンサルタント)
 - 14日 第196回ヘルスケア研修会につき休み
 - 以後9月1日まで夏休み
 - 9月 8日 岡 惺治
 - 15日 三輪祐一 (東京都予防医学協会総合健診部長)
 - 22日 岡 惺治
 - 29日 第197回ヘルスケア研修会につき休み